●モノグラフ 小学生ナウ

叱り方と子ども

Vol.1-7

1981.教育図書出版(株)福武書店 教育研究所・調査室/加藤智禎・賀川雅子
千葉県教育センター所員 高橋美恵・東京学芸大学助教授 深谷和子

目次

調査を実施して ―― 2
要約 ―― 3
1．子どもはこんな風に叱られている ―― 4
●調査の概要……4
●こんな残酷な罰も……4
●親の叱り方の日常を追って……7
●叱られた時の怖さ……11
●叱られそうな予感……13
●叱責のききめ……14
2．叱られるのはこんな場面 ―― 16
●一番ひどく叱られた時の理由……16
●どんな時に叱られるか……17
3．子どもの言い分 ―― 20
●不当な叱り方をしていないか……20
●両親の叱り方についての不満……22
●まとめにかえて……24
資料1・調査票見本 ―― 26
資料2・学年・性別集計表 ―― 33

調査概要

調査対象●東京・奈良・大阪の小学4・5・6年生　計1840名
調査時期●昭和56年5月
調査方法●学校通しによる質問紙調査

調査を実施して

おとなは毎日、ほめたり叱ったりをくり返しながら、子どもを育てている。このありふれたしつけの技術が、効果的に行われなかったら、家庭教育も学校教育も到底よい実を結ぶことはできないだろう。

しかしその中でもとくに、「叱る」または「罰する」行為は、時には子どもを心理的に傷つけ、人権を侵害し、まれにはその生命をも危うくするような非教育的な行為ともなりうることを、われわれは見聞している。つまり叱ること・罰することは、子どもの教育において、有効性と危険性をあわせ持った、両刃の剣とも言えよう。

しかも「叱ったり罰したり」が家庭や学校で、毎日どんな風に行われているかは、世間の目には触れにくい。とくに家庭は一種の密室とも言える性格を持つ場なので、そこでの行為は部外者には伝わりにくい。したがって、そこでの叱り方や罰し方が、仮に世間の基準から大きくズレていたり、その子どもに適切でなくても、犠牲になるのは子どもだけで誰も助けに行ってやることはできないのである。毎日、どんな親がどこでどんな風に子どもを叱ったり、罰したりしているのか。教師はどうなのか。そうしたことを考えると、われわれ部外者は時として不安に思うこともある。

今回のこの調査レポートは、すべての子どもたちがおとなたちから一番教育的で適切で意味のある叱られ方をしてもらえるようにと願って、子どもの叱られ方の実態を探り、またそれについての子どもの不満や言い分をも聞いてみようとするものである。

昭和56年11月

千葉県教育センター所員
高橋美恵

東京学芸大学助教授
深谷和子

本報告書の要約

① ヒステリックに叱る両親の姿

両親から「ひどく叱られた」という強烈な記憶を持つ子どもが全体の8割。その記憶の中では、母親も父親に負けないくらいの残酷さで子どもに迫っている様子が見られる(表2)。

②「にらんだ」ことのない父親が約1/4

一部には、厳しい両親もいるようだが、ほとんどの親がふだんはあまり叱らないらしい。日常的には母親の方が叱る頻度が高くなって当然であろうが、それにしても「叱らない父親」の印象が強い(図2－1、図2－2)。

③ 自衛する子どもたち

それほど叱られたことのない子どもたちでも、やはり両親とも怒るとかなり怖いと答える子が6割にのぼる。親は、子どもにとっては今もけっこう怖い存在であるらしい。そこで子どもなりに、親の顔色を見て叱られないよう用心しているし、何度も同じことを言われずに直そうともしているようである(図5、図10)。

④ 母親化しつつある父親？

父親と母親の叱り方は、見事に足並みがそろっており、予想された役割の分担はみられなかった。どちらかといえば父親の方が全体に「叱らない」イメージであり、社会的ルールを教え込むという役割にも消極的であるようだ(図11－1、11－2)。

⑤ 叱り方への不満もちょっぴり

両親の叱り方についての子どもの不満は少なく、現代の理解ある両親像がうかがえる。が、「叱らない親」・「子どもに不満を抱かせない親」が、果して理想的な親といえるのだろうか(図12、図13－1、図13－2)。

1．子どもはこんな風に叱られている

叱られたり罰を受けたりするのは、それが当然の場合ですらも、決して愉快なことではない。むろん叱り手の方にしたってそうである。にもかかわらず、おとなたちは毎日いろいろな場で、さまざまな形で子どもを叱ったり罰したりしなければならないし、子どももそれを受け入れて暮らしている。この章ではまず子どもたちが、われわれの目のとどかない所で日頃どんな叱られ方をしているかに接近してみることにしよう。

調査の概要

上記のような意図で、巻末に掲げたような質問紙を用いた調査が行われた。サンプルの数は、表1に掲げたように、4年生から6年生までの小学生1840名。首都圏と奈良県・大阪府の公立小学校5校に、学校経由で調査を依頼した。調査時期は昭和56年5月であった。

表1・サンプル数

（人）

学年＼性	男子	女子	計
4年	284	253	537
5年	320	308	628
6年	342	333	675
計	946	894	1,840

こんなに残酷な罰も

親の叱り方には個人差がある。厳しい親もいれば、やさしくて全く子どもを叱ったことのない親もいるだろう。体罰をしょっちゅう用いる親もいるし、それのできない親もいる。親というものは、どんな叱り方や罰の与え方をしても、わが子がそれを自分たちの敵意や憎悪の表現と受けとることはないと信じて、この行為をくり返すのであろう。

しかし立場を逆にしてみると、おとなになったわれわれですら、未だに親から受けた忘れられない厳しい叱られ方、大きな罰のいくつかの思い出を持っている。それらはある意味では、われわれの心に一生残る傷口かも知れない。

本レポートの冒頭では、まずこの点を掘り起してみることにしよう。子どもに「今までに一番ひどく叱られたとき、どんな叱られ方をしましたか」とたずねて、自由記述させた内容を整理してみた。

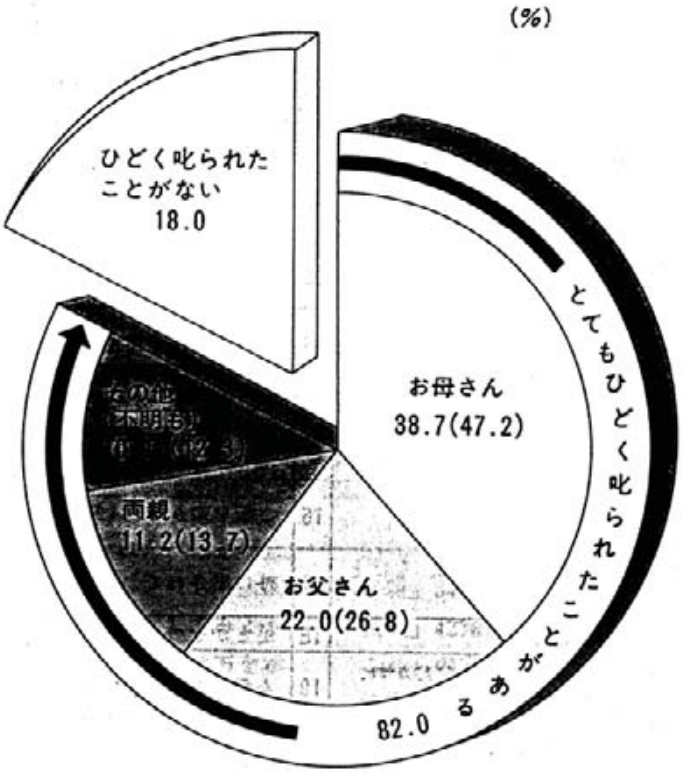
この質問に対して「そんなにひどく叱られたことはない」「もう忘れてしまった」と答えた子どもは2割。実に8割の子どもが、何らかの強烈な記憶を持っている（図1）。そのいくつかを6ページ表2にまとめてみた。

なんとひどい叱られ方、ひどい罰を子どもは受けているのだろう。むろんこうしたことが日常的にくり返されているとは思われないが、ただの一度でも「物を投げつけられる」「包丁でおどされる」「火傷させられる」「髪をつかんでひきずり廻される」「死ねと言われる」ようなことがあっていいものだろうか。こうした行為が、たとえ教育やしつけの名のもとであっても、許されていいものだろうか。それらの行為の中に、仮にどのような親としての想いがこめられていたにせよ、少なくとも子どもたちのたどたどしい文章の行間から立ちのぼって来るのは、親への恐怖と憎悪の感情でしかないように思われる。少なくとも親

への愛情や理解というニュアンスは、到底汲みとるべくもない。

では、家でこうしたひどい叱り方をするのは誰なのか。父親なのか。それとも最近また一段と強くなったと言われる母親なのか。図1の中央には、「今までに一番ひどい叱り方をした人」についての結果を掲げた。「お母さん」と答えている子どもが39%で、「お父さん」の22%を大きく上回っている。先の表2の叱られ方の欄を見ても**母親がけっこう父親に匹敵するほどの残酷さで子どもに迫っている**印象を受ける。ある意味では、子どもの最も身近かな人である母親からのこうした行為は、父親からのものよりもはるかに手痛い心理的な傷を子どもに負わせるのではないかという気もしてくる。

図1・一番ひどく叱った人



※(　)内は、叱られたことがある子どもの中での割合を示す。

表2・一番ひどい叱られ方(抜粋)

	《お父さんから叱られた場面》		《お母さんから叱られた場面》
1	500円さつがなくなっていて、わたしたちのせいにしそとへ出され9時ごろまでたたされていた。それから家に入らされ、せいざさせられ、あついお湯をふとももにかけられた。	1	ふろの中にとじこめられ、カギをかけられた。しばらくして出してくれたけど、たたかれたり、ライターで手をすこしやけどさせられた。
2	ほっぺたをたたかれ、ふとんたたきで何回もたたかれた。	2	水をぶっかけられた。
3	ほねがおれそうになって、いきが20秒くらいとまった。	3	おきゅうを手につけられた（雨の日に水鉄砲で遊んでいるのをみつかって）。
4	足首をもって、3階からぶらさげられた。	4	つくえの上に出ている物を投げつける。
5	なげとばして、物を言わなくなった。	5	死ねと言ってほうちょうをもってくる。
6	おねえちゃんとわたしのちょ金ばこをなげた。	6	そうじきやほうきでぶつか、ほうちょうを持ってきてやるマネをする。
7	まず頭の横をげんこつでたたき、その反対をげんこつでやる。それをくり返し、100回ぐらいやられた。	7	かびんをなげる。
8	ぼうでたたかれたりどなられたり、たたかれたり。	8	体にまたがる。
9	いすをなげたり、本をなげたり、ほっぺたをおもいっきりたたく。	9	わざと階段からおとそうとする。
10	ものおきに3時間ほどとじこめられた。	10	あめを思いっきり、頭にぶつけたこと。
11	足をかみつかれた。	11	ほっぺたをたたいて、外に出す。そして、ごはんぬかれる。
12	おしりや頭とか何回もたたかれて、夜なのに外にしめ出された。	12	なぐられて、おこづかいを半分にされた。
13	人のいないところにいって、思いっきりゲンコツをする。	13	板の間で正座をやらされて、ごごとを言われた。
14	バットでどつかれた。	14	ぶったたかれたり、髪の毛をひっぱられたりした。
15	けったり、ぶったり、一時間正座させられた。	15	けったり、ころがされたりされて、お母さんは外にいっちゃった。
16	なぐったり、けったり、外に出されたりする。だいじなものをとられたりした。	16	ご飯をぬかれた(夕飯と朝ごはん)。
17	かみの毛をもって、2・3回ふり回され、なげとばされた。	17	外に出されて、はだしで水をかけられた。
18	体がふっとぶほど強くけとばした。	18	足とかをつねって、足と手をひもでしばっておく。
19	せんひきで眉をひどくたたかれ、頭をたたかれ、おしりをひっぱたかれた。	19	ムチでたたかれる。
20	ふで入れであたまをかちなぐり、首をしめて、つまんで外にほうり出し、なぐったり、けったりされた。	20	ひっぱたいて、外にひきずり出し、ドアのかぎをしめて、1時間ぐらい外にはだしで出ていた。
21	おねえちゃんといっしょに、やさいを入れるれいぞうこに入れられた。	21	手あたりしだいに物をなげつけられ、おいかけられ、たたかれ、外に出された。
22	ひもでつるし上げられた。	22	えん足の前の日の夜、外に出されて家に入れてもらえなかったこと。
23	おふろやおしいれへとじこめたり外へ出される。	23	はだかにして、ベランダへ行かされる。
24	刀のうらでおしりをひっぱたく。	24	ほっぺたをつねりながらもち上げて、外に出し、カギをしめていれない。

	〈お父さんから叱られた場面〉		〈お母さんから叱られた場面〉
25	学校へ行きたくなくて、なぐられたり、けられたりした事。	25	「でていきなさい」「出ていかなければわたしがでていきます」といってしばらくいなくなる。
26	「おまえのような子はでていけ、しね」とげんこつされる。	26	姉とけんかして「二人とも出ていきなさい」といわれ、ドアをこわれるくらいつよくしめ、ものをいわなくなってしまったことがある。
27	でていけと、にもつをまとめて、外に出された時。	27	わたしのかおをにらみつけて、「家から出てけ」とひどくいう。
28	おなかをけったり、なぐったりして、その日1日おなかがいたかった。	28	始めに言葉でおせっきょうされ、ほっぺたなどをたたかれて、「もうどっかへいってかえってくるな」といわれた。
29	きょうだいげんかでおこられて、外に出してドアをしめて、あさまであけてくれなかった。	29	スリッパでたたかれた。
30	死ねといって、ちゃわんでぼくの頭をぶったたく。	30	ほっぺたを、両手で両ほうたたかれた。
31	はたきをもってたたいたり、足でけったりする。	31	私が「学校に行きたくない」といったら、お母さんもなきながら、「お母さんはそんな子にそだてた覚えがない」といって、ほっぺをひっぱたいた。
32	おとうさんにもちあげられ、なげとばされた。	32	せいとんが悪くって、物をぽんぽんなげて、けったり、たたいたりやられた。
33	ひっぱたいて、すごくおこっていた。なんかいもひっぱたいて、手のあとがつくほど。	33	ひどく厚い本で頭をたたかれた。
34	けんどうのしないをもってたたいたり、足でけったりする。	34	ももをぶたれて、はれて、つめでひっかかれて血が出た。
35	ベルトでたたかれる。	35	プラスチックのようなバットでたたかれた。

親の叱り方の日常を追って

これまでで一番ひどく叱られた（罰を受けた）思い出についてはこのぐらいにして、次はもっと日常的な叱られ方に接近してみよう。図2－1・図2－2に、父親と母親の叱り方を示した。

まず父親について見よう。図の上半分は体罰を伴わない叱り方を、厳しさの度の増す方向で並べてある。下は体罰を伴う叱り方である。図で明らかなように全体としては「1度もない」「たまにある」がほとんどで、しょっちゅう叱ったり体罰を加えたりしている父親も数パーセントはいるものの、一般的には「叱らない父親」の印象が強い。体罰については、1度もしたことのない父親が多いのはわかるが図の①「1度もにらんだことのない父親」24%、②「1度もこごとを言ったことのない父親」34%、④「1度もどなったことのない父親」42%の数字は何を意味するのだろうか。これらの家庭では、あるいは母親だけが、阿修羅のごとく髪をふり乱し、声をからして子どもたちのしつけをしているのかもしれない。父親はなぜしつけから逃げているのだろうか。

次に母親の叱り方である。これを父親と対比させたのが図3である。全体としてまず母親の方が叱る度合いが多いこと。また罰の与え方に差があって、父親は「ゲンコツ」が多く、母親は「にらむ」「こごと」「説教」が多く、また時々「出て行けと言う」「無視する」「つねる」「閉め出す」などのテクニックも使っているらしいことがわかる。

図2−1・どんな叱り方をされているか

《お父さんの叱り方》 (%)

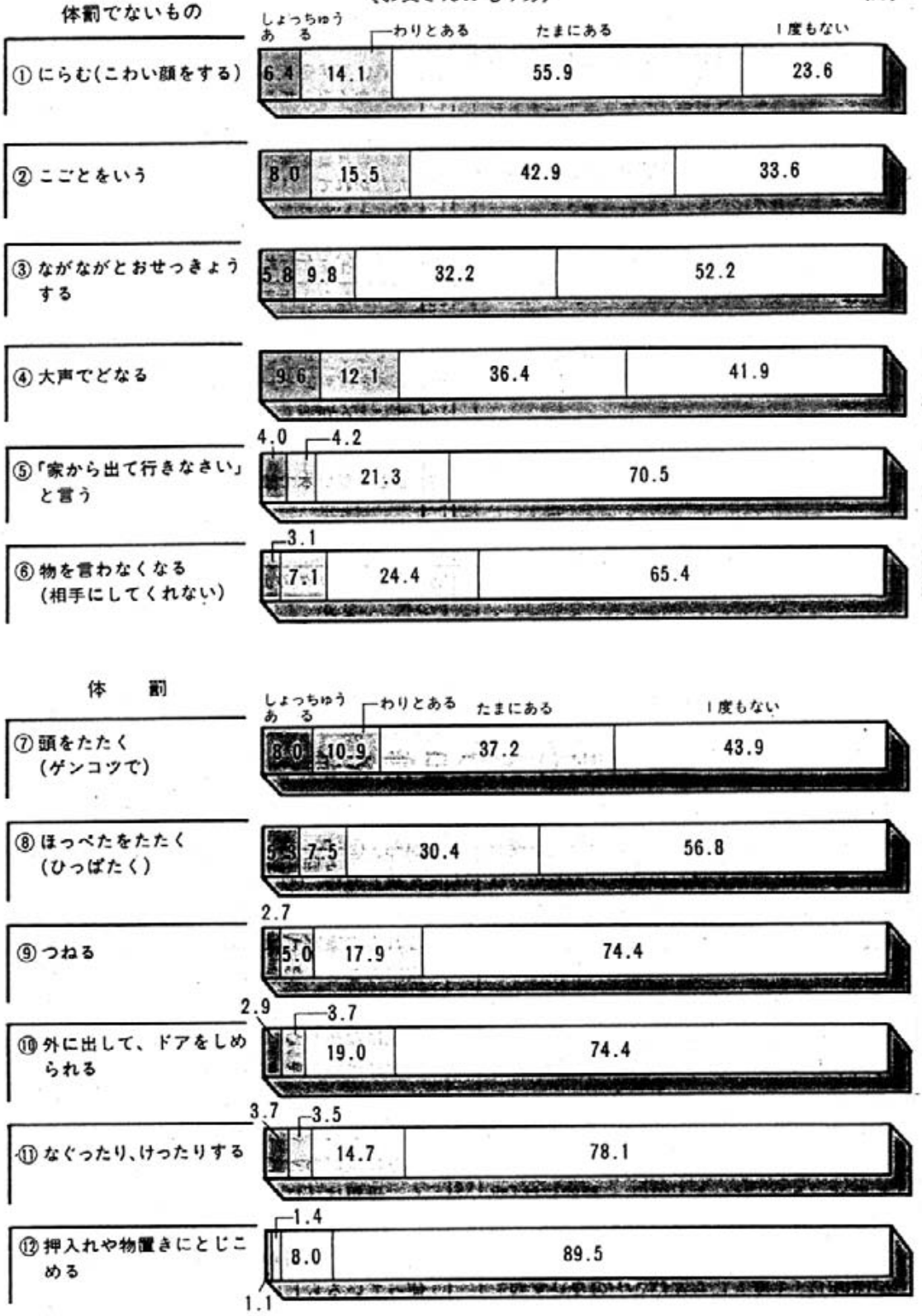
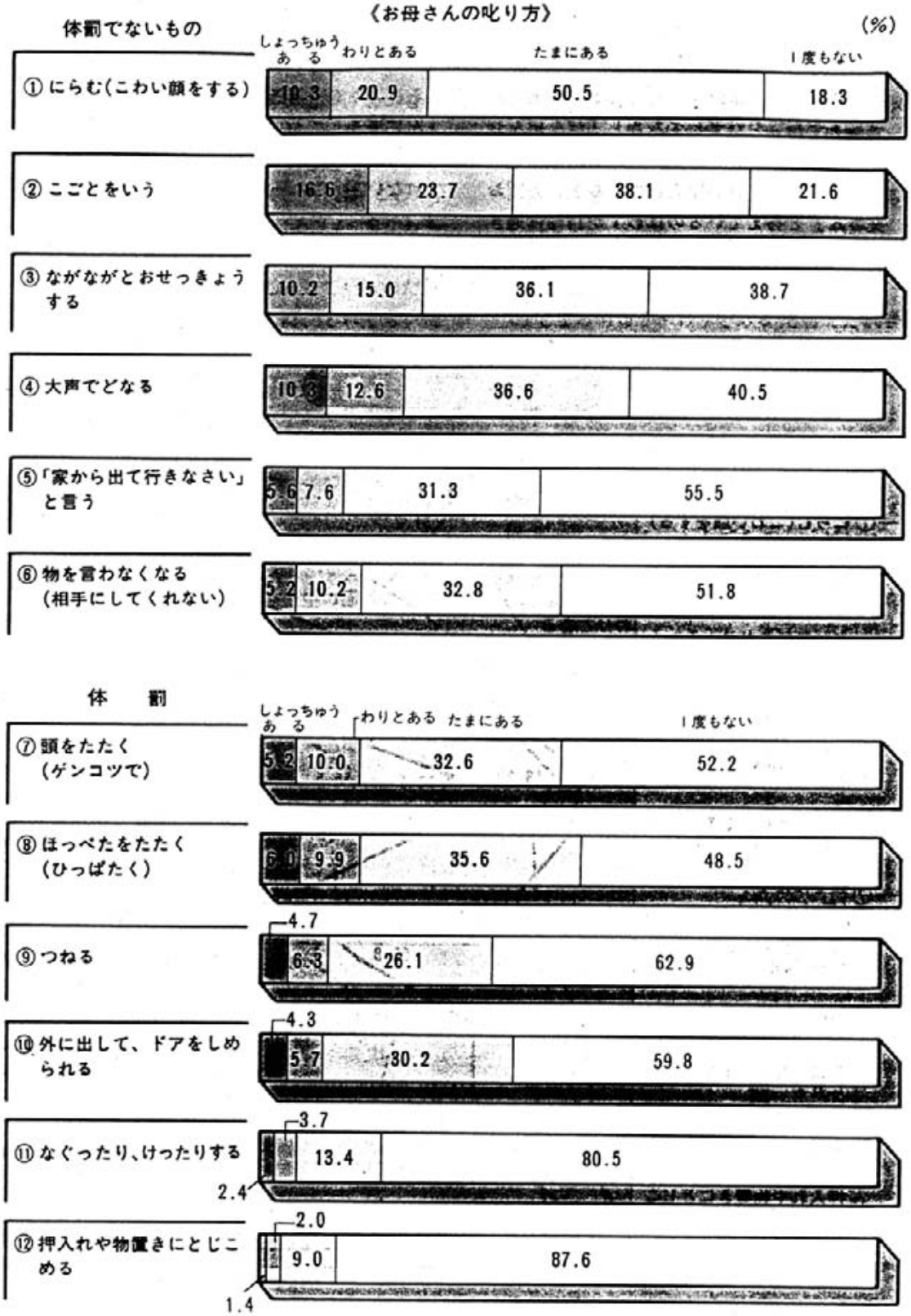


図2－2・どんな叱り方をされているか

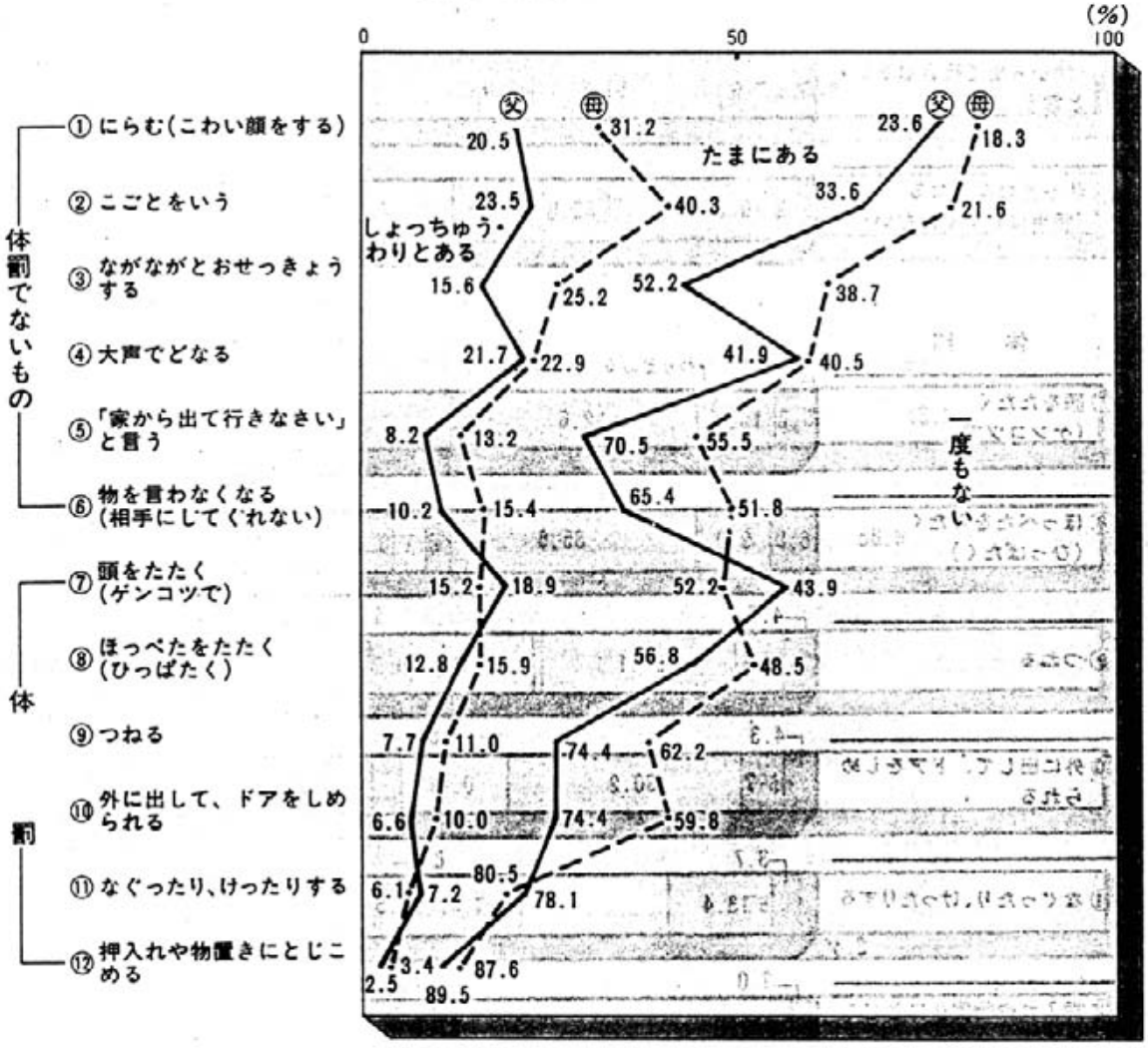
《お母さんの叱り方》

(%)



以上のデータから浮び上がる両親像は、少なくともかつての時代の典型であった「厳父・慈母」というイメージからはほど遠いように思われる。さらにこの点を見ようとしたのが、図4である。「ふだんどちらによけい叱られていますか」とたずねてみると「だんぜんお母さん」26%、「まあお母さん」35%と6割が母親の方によけい叱られていると答え、「お父さん」と答えているのはわずか14%に過ぎない。むろん子どものそばに長時間いる母親の方がよけいに叱る機会を持つのは当然であろうが、先の叱り方の内容や頻度を合わせて考えると、叱り方から見た現代の両親像は、「厳父・慈母」よりは「強母・慈父」に近く、それよりも一層近いのは、ふだんはいいかげんに済ましておいて「たまにヒステリックに叱るだけの両親」ということになるのかもしれない。

図3・両親が叱る量



叱られた時の怖さ

一部には、厳しい両親もいるが、おおむね母親からこごとを言われたり、父親ににらまれたりという程度の叱られ方で過ごしている子どもたち。彼らにとって、両親は「こわい」存在ではなくなっているのだろうか。すなわちある意味で両親はオーソリティーとしての脅威を失った存在になってしまっているのだろうか。図5は、「叱られた時、どれくらい怖いか」を父、母、担任の先生についてまとめたものである。

父親が怒ると「とても怖い」とする子どもがやはり37%と多く、「かなり怖い」まで含めると6割にのぼる。母親については「とても怖い」はやや減って30%となるがそれでも「かなり・すこし怖い」まで含めると、父親の怖さを抜いて9割近くの子どもたちが母親も怖いと言う。また担任の先生の怖さに比べると、両親の方が怖いと思う子どもの割合が高い。子どもたちにとって両親は、まだけっこう、怒れば怖い存在であるようだ。

また叱られた時の怖さについては、男子と女子とでやや異った反応がみられた。図6に示したように、**男子は父親を、女子は母親を、より怖いと答えている。異性の親子関係は、どこかに甘さややさしさがつきまとうのかもしれない。**

このことは図7「叱られ方の違い」のデータにも見い出される。図は12の叱り方について「しょっちゅう・わりとある」と答えた割合を示したものだ。左側の父親について見ると⑥「物を言わなくなる」を除いた全項目で女子より男子の方がより多く叱られており、また母親（図の右）の叱り方のほうが、男女に対する差がやや小さくなっている。両親ともに概して女子が叱られる割合が低く、特に父親は女子には甘いようである。「ゲンコツをする」をはじめとして、ほとんどの父親が女子には体罰を与えていない。ひどく叱られた体験が少ないことから、女子の方が男子よりも父親を「怖い」と感じていないという差が出てきているのかもしれない。

図4・両親のどちらに多く叱られているか

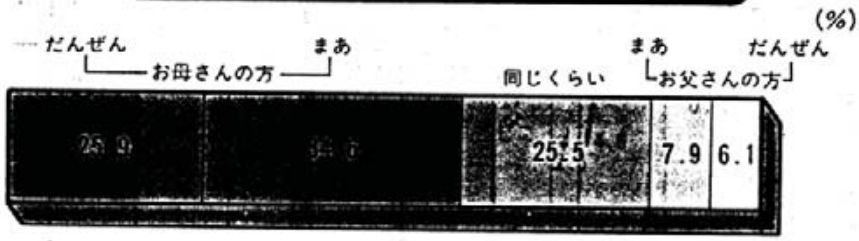


図5・叱られた時の怖さ

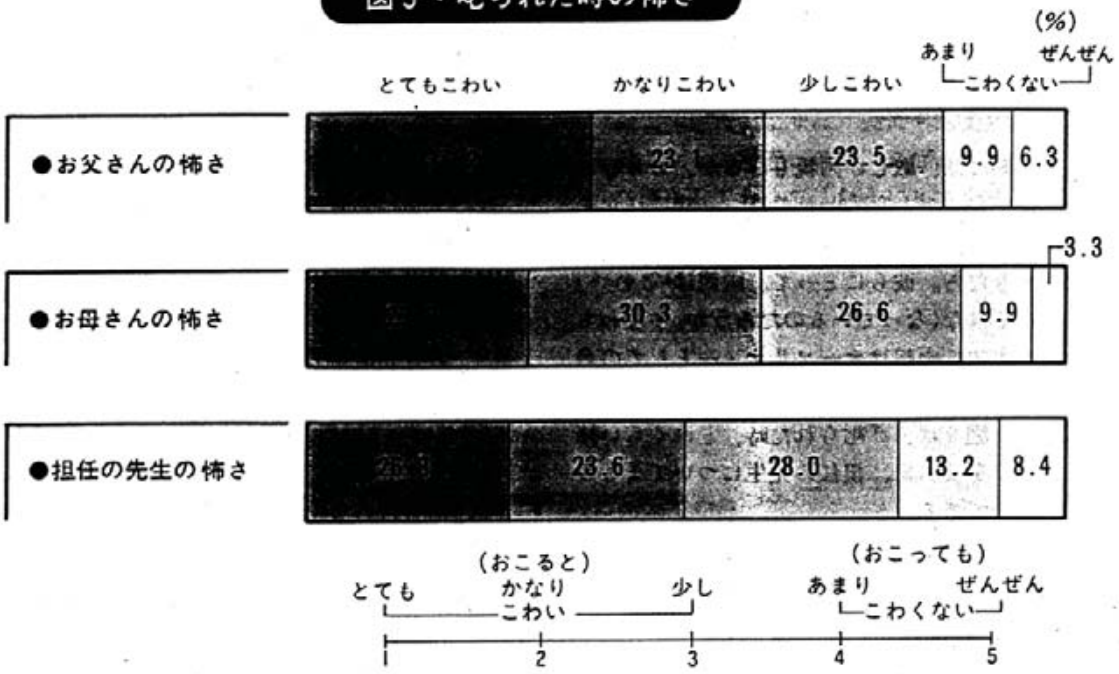
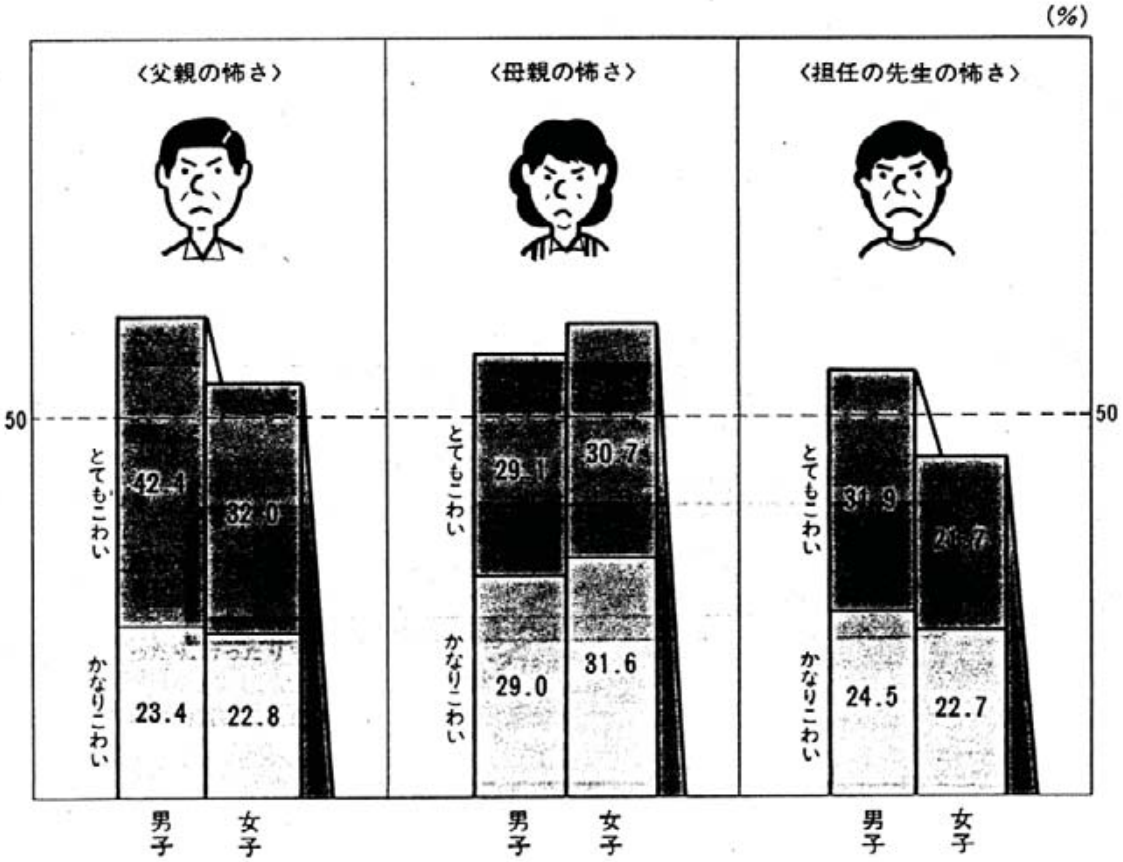
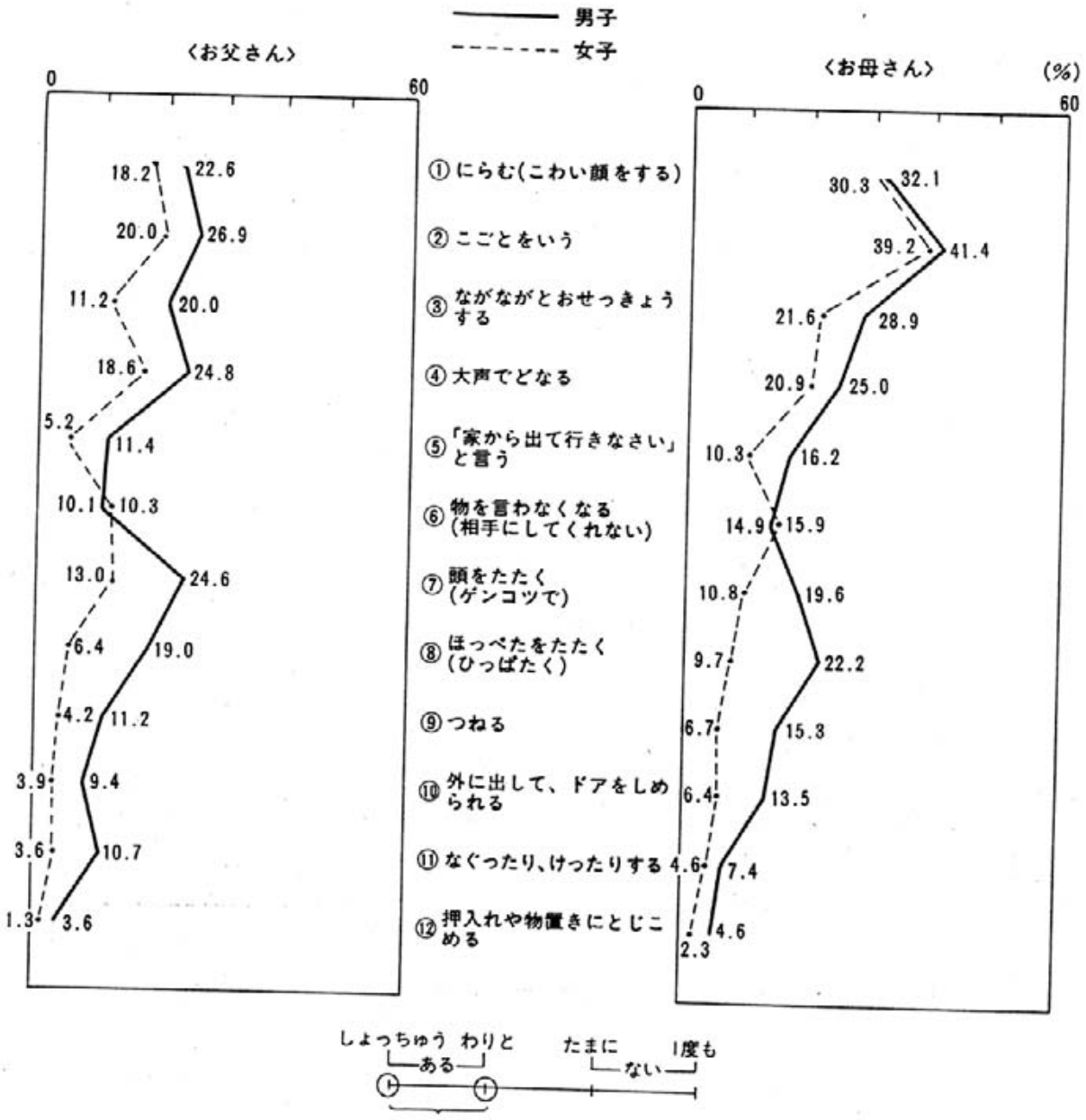


図6・叱られた時の怖さ×性別



叱られそうな予感

図7・男子と女子の叱られ方の違い



昔の両親の怖さを知っている者にとっては、今の両親は、「なんとやさしく叱らない両親だろう」と思う。だが当の子どもたちにとっては、それでもやはり「怒ると怖い」両親であるらしいことを、図5～7で見てきた。

さて、個々の両親がどんな時どのぐらい叱るかは、むろん個人的なしつけの原則や、大きく言えばその人生哲学によって決まるのだろう。しかし親が子どもを叱るのは、決してこのような原理原則にそってのことばかりではない。親も人間である以上、その日の気分や感情によって、叱ったり叱らなかったりが出てくるのは仕方のないことかもしれない。そのことを子どもの方でも察知していて、両親のきげんのよし悪しには、わりと敏感なものである。この点を示すのが図8である。

「今日は叱られそうだな」とわかりますかとたずねてみると、母親に対しては65%、父親に対しては50%の子どもが「今日は叱られそうだ（雲行き不穏）」とだいたいわかると答えている。とくに父親と母親とでは、わずかだが、母親の方がやや感情を表に現し易いものらしい。

そして、次の図9に見られるように、「叱られそうな時」には、子どもの方でもそれなりの防衛策を構じているようだ。「叱られないよう気をつけている」子どもが88%、「ごきげんをとる」35%、「顔をあわせないようにする」42%などと子どもたちの苦心が表れている。昔も今も叱られるのがいやなことには、変わりがないのだろう。

叱責のききめ

図8・「叱られそうだな」とわかるか

	よくわかる	だいたいわかる	あまりわからない (%)
お父さんについて	12.3	37.7	50.0
お母さんについて	22.2	43.2	34.6

親の顔色を見て叱られないように多少とも用心するほどの子どもたちだとしたら、ふだんの生活の中で「1度叱られたら2度とは叱られないように、言われたことを守る」ようにもしているのだろうか。この点を図10に掲げた。

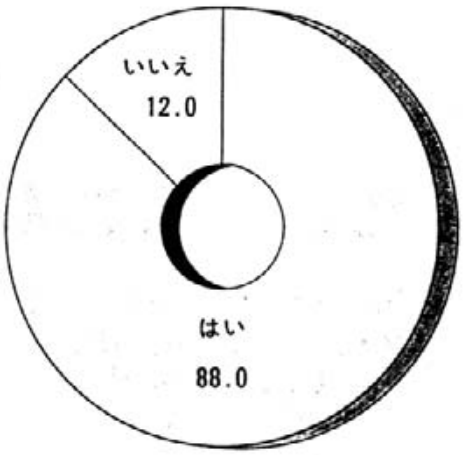
「1度でなおす」と答えている子が29%。こういう子どもの母親になってみたいものである。「2～3回言われないとダメ」が52%。平均的なスタイルがこれなのだろう。また、「何度も言われる方だ」と自ら任じている子どもも18%はいる。

しかし、この18%という数字は、どうも親の側の実感とは遠いもののような気もする。**子どもの側では、しつけに関してあまり「親を手こずらせている自分」というイメージは持ってはいないようだが、**親にとって子どもは、ずい分手をやかせられるもののような気がする。このイメージの食い違いはどこから出て来るのだろう。

図9・「叱られそうな時」の子どもの防衛策

(%)

① しかられることをしないよう気をつける



③ なるべく顔をあわせないようにする

② ごきげんをとる

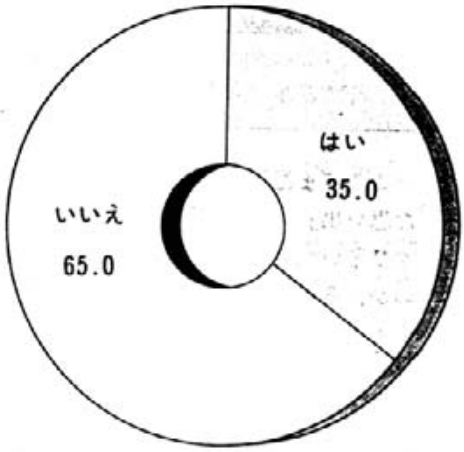


図10・叱責のききめ

(%)

2.叱られるのはこんな場面

それではいったい子どもは、日頃どんな場面で叱られているのだろうか。親にとって、いちばん気になる子どもの行動とは、どんな種類のものなのだろうか。これはいわば親の人生観や理想の人間像にかかわってくるテーマである。親たちは無意識のうちに、それを「しつけ」の場面で表出していることになるのだが、ともあれまずデータを見て行くことにしよう。

一番ひどく叱られた時の理由

ここでまた始めの「いちばんひどく叱られた思い出」に戻って、いったいなぜそんなにもひどい叱られ方をしなくてはならなかったのか、その場面をひろい出してみよう。

まず圧倒的だったのは、

○夜遅くなって帰ったとき（帰宅時間が遅くなったなど）

○きょうだいげんかをしたとき（とくに弟や妹をなぐったりケガをさせたなど）

の2つである。この2つはいわば子どもに対する愛情（子どもを失う不安）につながるもので、おそらく昔の親たちとも共通したものと思われる。いわば人間として親としての根源的な感情に触れるもので、それだけに感情の統制がつかなくなってしまうのも、わかる気がする。その他の理由はまとめて示せるほ

どの出現率をみないので羅列してみると、

- ○学習塾やそろばん塾をサボったのがばれたとき
- ○ピアノやバイオリンなどの練習をいやがってなまけていたとき
- ○言葉の使い方が悪かったとき
- ○整頓が悪くて、いくら言われても片づけなかったとき
- ○ウソをついたとき
- ○通知表があまりに下がってしまったとき
- ○テレビの見すぎやチャンネル争いをしたとき
- ○ドリルをやっていて、わからなかったとき
- ○ご飯を食べるのが遅かったとき
- ○内緒でインベーダーゲームをしたのがばれたとき
- ○むだ使いをしたとき
- ○そろっている茶わんを割ったとき
- ○強情をはったり、親に反抗したとき
- ○学校に行きたくないと言ったとき
- ○親の悪口を言ったとき
- ○言われてもなかなか勉強しなかったとき

どれも、こうして文章化してみると、それほどの理由（子どもたちが忘れられないほど厳しい叱り方や罰を受ける）ではないような気もするが、おそらくそこにいたる何らかの感情的経緯のようなものが両者の間にあってのことだったのかもしれない。

どんな時に叱られるか

親が子どもを叱る場面は、いわば親が子どもに社会の価値観を伝達する場面である。善悪の判断基準や社会のルールを子どもたちは親から取りこみながらおとなになるが、それは「叱る・ほめる」という具体的な場面でのひとつひとつの行為の積み重ねによるものだ。**おとなたちのこうした行為がなかったら、子どもは決して、子どもに理解できるような形で、社会や人生や人間などの大きな世界を把握することはできないであろう。**

この点を見るために、図11－1、図11－2に、「こんなことをしたらどのくらい叱られると思うか」とたずねた結果を示した。

まず全体としては両親の足並みが非常によくそろっていて、「父親が叱る行為」「母親が叱る行為」にほとんど差がないことが特徴である。両親の学歴や社会的経験が均衡し性役割が希薄になって、現代は「一家に同じようなおとなが2人」という感じになってきていると言われるが、この図にはまさにそれが表れていると言えよう。しかし多少の役割分担の違いをも含めて、両親の間に全く個性や持ち味の違いがなくなっても、子どものパーソナリティー形成は果してうまく行くものなのだろうか。むろん両者の間に、行動のしかたやしつけの内容をめぐって大きな矛盾があってはならないとされるものの、しかしこう等質的であることもどうか、という気もしてくる。

さて、叱られる場面をもう少し詳細に見て行くことにしよう。まず一番叱られそうなのが「お金の持ち出し」で、90％以上の子どもが「とても・わりとひどく叱られるだろう」と答えている。次いで②親にうるさいと言った場合、③学校を休みたいと言った場合が、上位3つである。

しかしここで注目したいのは、親たちの間のしつけ態度のひらきとでも言うべきものである。上位3つの項目についても、必ずしも全部の親が叱るとは決まっていない。たとえばお金を持ち出せば、79％の母親はひどく叱り、「わりと」を含めると94％の母親はこれを叱

図11－1・こんなとき、どれぐらい叱られるか

〈お母さんは、こんな時叱る〉

(%)

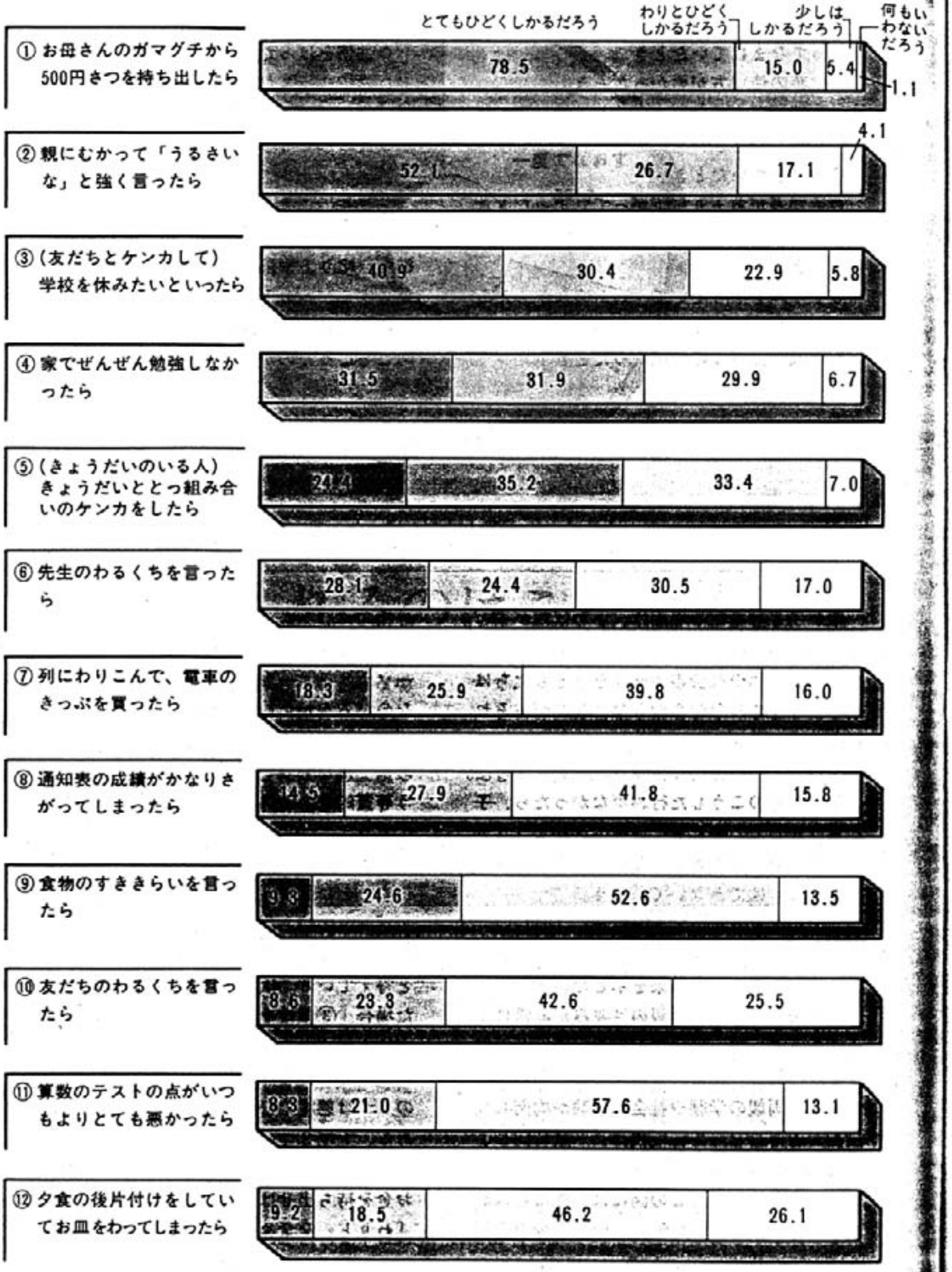
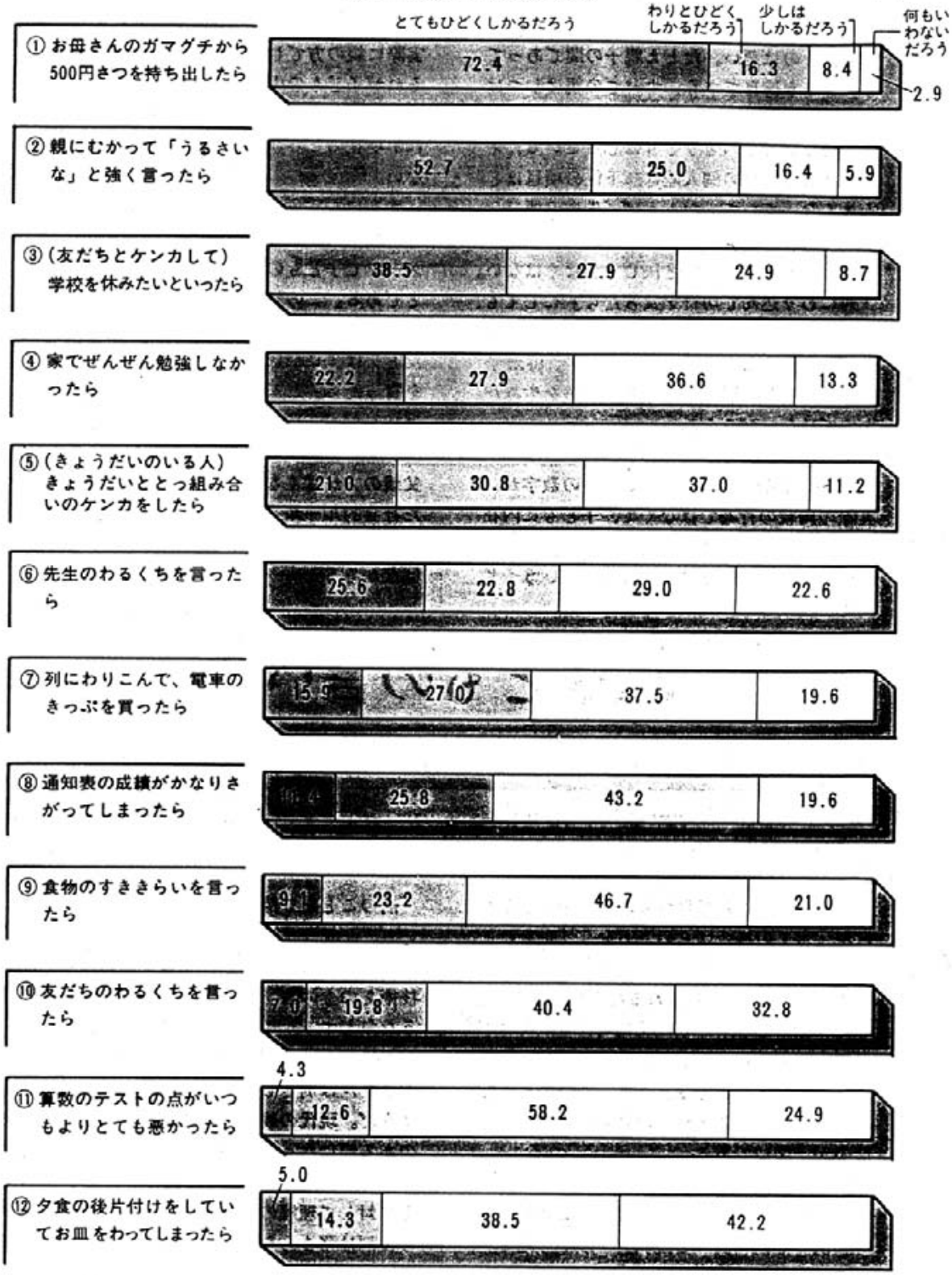


図11－2・こんなとき、どれぐらい叱られるか

〈お父さんは、こんな時叱る〉 (%)



る。しかしこの行為に関しても5％の母親は少ししか叱らないし、1％の母親は「何も言わないだろう」と子どもは思っているのである。すなわちいちばん上位の項目、「他人の物を盗むのは悪い。たとえ親子の間であっても」という徳目ですら、すべての親はしつけの中でこれを子どもに伝えようとしているわけではないのだ（と子どもは思っている）。そのようなしつけの個人差は、下位の項目ほど大きくなっていて、たとえば「先生の悪口」を言った時、ひどく叱る母親は28％だが、何も言わない母親も17％と決して少なくはない。「列にわり込んで切符を買ったら」にしても、ひどく叱る母親18％に対して、何も言わない母親も16％。このような積み重ねが、将来子どもたちの人間形成に大きな個人差を生みだすのではないだろうか。

但し、データの読みとりで一つ留意しておかなければならないのは、これらの数字が、実際の両親の行為ではなくて、子どもに内在する両親の行為である点だ。つまりこれらは「たぶん両親はこうするだろう」という子どもの予想を示した数字である。しかし考えてみると実際に両親がどう行動するかより、子どもの中にとり入れられた両親の行動基準の方が、より重要な意味を持つとも考えられる。実際に親の方でしつけをしているつもりでも、それが子どもの中にとり入れられていなければ、しつけをしていないのと同じことだ。これが現在のしつけの問題点であるのかもしれない。

さらにもう一つ見落せないことは、父親と母親では、父親の方が全体に「叱らない」イメージで子どもの中に受けとめられていることである。この傾向はすでにくり返し指摘してきたが、ここでもまたそれが表れている。たとえば先に挙げた⑦「列にわり込んで切符を買ったら」に対して、「ひどく叱る」母親は18％だが父親は16％、逆に「何も言わない」母親は16％で父親は20％。わずかではあるが、父親の方が甘くなっている。本来ならこうした社会的ルールをきちんと子どもに教え込むことこそ父親の重要な役割であるはずなのではなかろうか。

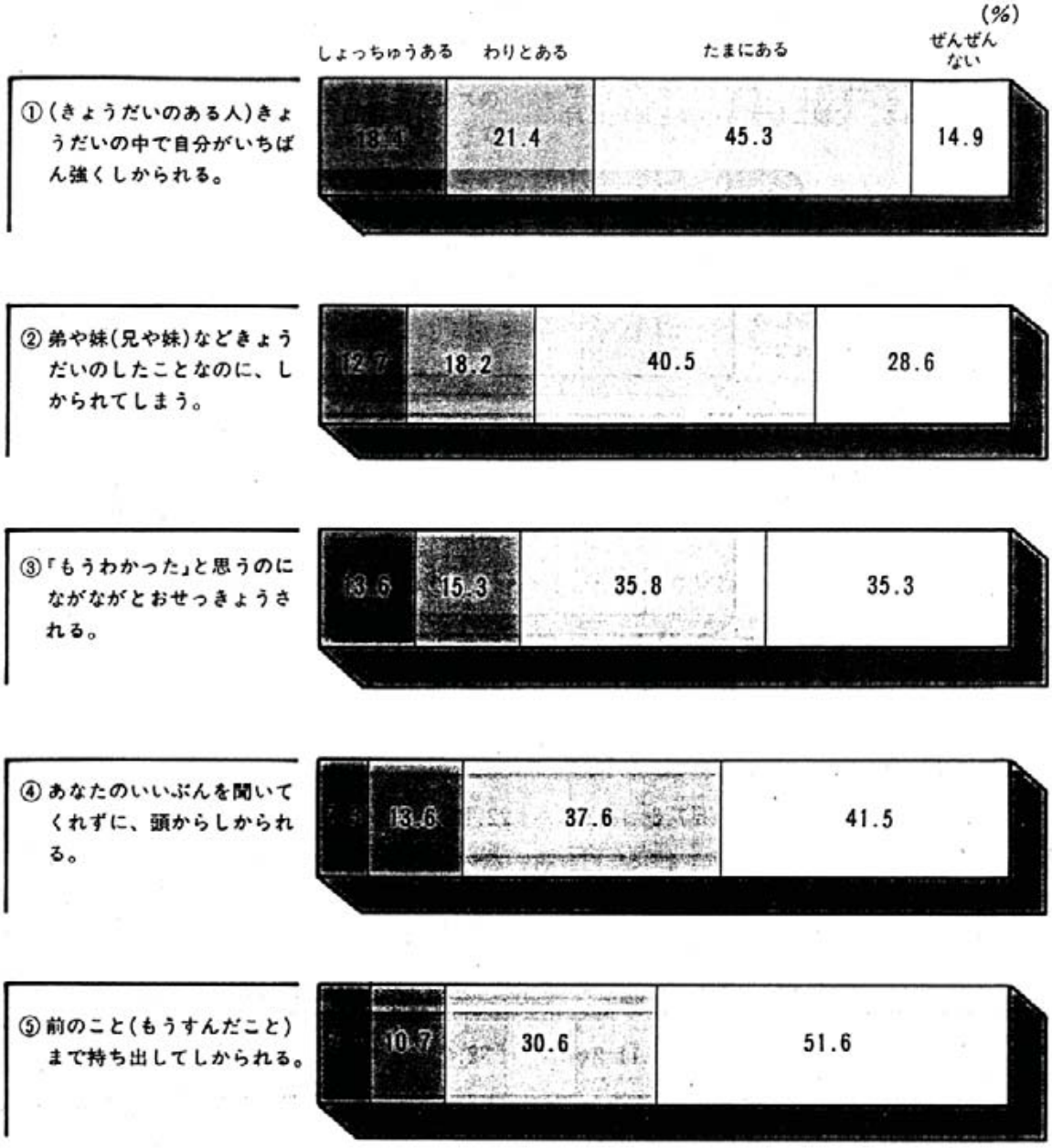
3.子どもの言い分

不当な叱り方をしていないか

子どもは叱られて育つものだ。子どもたち自身、多くの場合はそのことを、「叱られるのはいやだが、自分はそれだけのことをしてしまったのだから、叱られるのも仕方がない」という納得のしかたで、受け入れているのであろう。しかし子どもたちにしてみれば時には「不当な叱られ方だ」と思う場合もあるだろう。そうしたことがどのぐらいあるかを見たのが、図12である。

5つの不当な叱られ方のうち、上位2つがきょうだい関係をめぐってであることが面白い。次いで、「長々と説教」「頭から叱る」「前のことまで持ち出される」の順になっている。しかし子どもたちの答を見ていると、昔の親たちと比べて、今の親たちの叱り方の技術そのものは、かなり向上してきているような気もする。子どもに反発されるような叱り方は（きょうだいのとり扱いをめぐってのトラブルは別として）少なくなってきているようだ。現代の親たちが子どもに対して理解のある親になってきていることは、この図からもかい間見られるようである。ただし子どもに対して理解のある親というだけでは、親の役割は務まらないとは思われるが。

図12・子どもからみた不当な叱り方

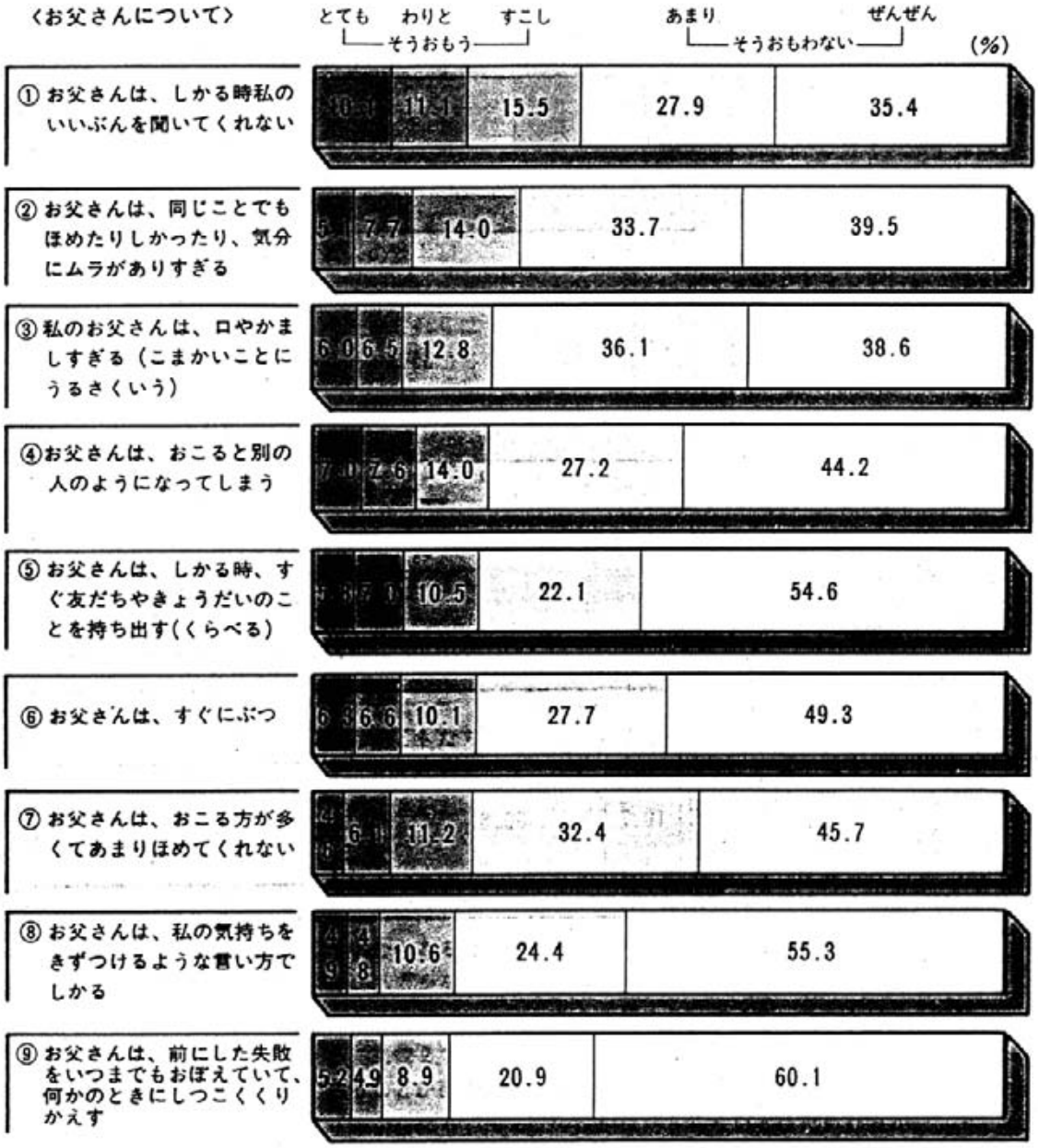


両親の叱り方についての不満

最後にもう少し、両親のそれぞれについて叱り方の不満を見てみよう。図13－1、図13－2は、9つの項目について、不満度の高い順に並べてある。父親に対する不満と母親に対する不満はかなり似かよっているが、

父親　①言い分を聞かずに叱る
　　②気分にムラがある
　　③口やかましい

図13－1・両親の叱り方についての不満



④おこると別人のようになる
⑤他人と比較する

母親 ①口やかましい
②他人と比較する
③言い分を聞かずに叱る
④おこると別人のようになる
⑤気分にムラがある

のように両者の間には、微妙なニュアンスの違いも感じられる。しかし両親を見比べてみると、母親の図の方が妥当な――つまり母親だったら昔も今も多分そうであろうと納得できるような項目の順序が見い出されるが、父親の方の並び方には、やや違和感を感じてしまう。かつてのように父権が失われていなかった時代なら、「口やかましい」が3位に上がることはなかったであろうし、「気分にムラがありすぎる」というのももっと下位にあったのではなかろうか。

図13－2・両親の叱り方についての不満